

19) ユキノシタとダイモンジソウ=雪の下と大文字草

ユキノシタはユキノシタ科の半常緑多年草で、本州、四国、九州の山中に自生し、特に湿潤なところに群生することが多い。高さは15~40cmになり、全体に赤褐色の細毛が生える。繁殖は匍匐枝によるもので、細い枝が地上を這って伸び繁殖する。葉は腎臓形の多肉質で掌状に浅く裂け、表面は暗緑色で白い斑が入る。5~6月頃20cm以上の長い花柄を出して、茎上部に多数の白い小花を円錐花序に咲かせる。花卉は上の3枚が小さく、下の2枚が大きく、これが大きな特徴になっている。和名の由来にはいくつかの説があって、雪のような花の下に葉が見られるためとする説、冬でも雪の下に葉が枯れずに残っているためとする説、雪の舌のことで、大きな2枚の花弁を舌に見立てたとする説などである。別称としてはキジンソウ、イワブキ、イワカズラ、イシガキバナ、イケノハタ、ベコノシタなどで、この他にも中国名をそのまま音読みしたコジソウなどがある。学名は『*Saxifraga stolonifera*』で、属名は「小石を砕く」という意味で、この草が尿路結石の石を溶かす作用があると信じられていたことによるもので、種小辞は「匍匐枝を持った」という意味である。イギリスでの呼称は『stone-break』とか『old man's beard』などで、フランスでは『casse - pierres』、ドイツでは『Steinbrech』、中国では『虎耳草』である。

ユキノシタは日本の原産種か中国からの帰化植物か定かではない。一般に広まったのは江戸時代のことで、1612年に編纂された『多識編』には、中国名の『虎耳草』に『登良乃美美』(トラノミミ)という読みをそえている。また1694年に出版された『花壇地錦抄』では「木かげまたは木石等に植えてよし」と具体的な栽培にふれている。生け花の家伝書である1684年の『立花正道集』(リッカショウドウシュウ)や『抛入花伝書』(ナゲイレバナデンショ)などにも取り上げられており、江戸時代には生け花の素材としても、かなり用いられたものと思われる。

ユキノシタの葉は天ぷらにしたり、茎やつぼみを塩漬けにして食用にすることもある。開花期に葉を摘んで日干しにしたものを漢方では『虎耳草』(コジソウ)と呼び、煎じて浮腫みや利尿、痔疾などの治療に用いる。民間では生葉を揉んだり、あぶったりして汁を出し、腫物や湿疹などに用いる。また葉の汁は耳垂れや小児のひきつけの薬としても用いられた。このため昔は庭に植えておく家も多く、園芸種としてはホシザキユキノシタやアオユキノシタなどの変種もある。

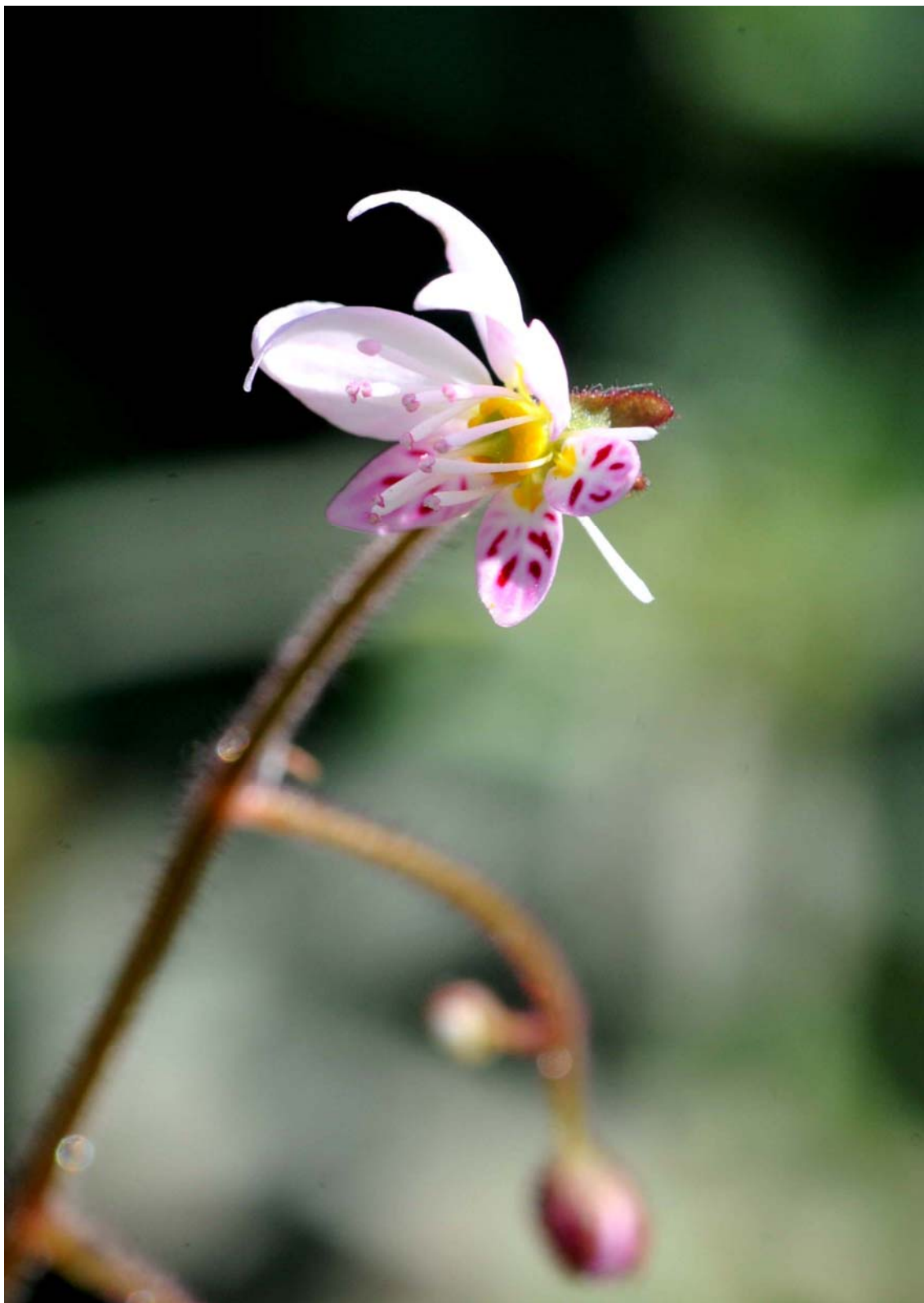
一方ダイモンジソウはユキノシタ科の多年草で、和名の由来は花の形が大の文字によく似ていることによる。近縁種にはジンジソウがあり、こちらの方は人の文字によく似ている。別称としてはユキモヨウ、葉の形がフキに似ているためにイワブキ、ニワブキなどで、学名は『*Saxifraga fortunei*』、種小辞は植物探検家として名を馳せた「フォーチューンの」という意味である。ダイモンジソウは花色の変化が多く、白、ピンク、濃赤など9~11月美しい花を咲かせるため、鑑賞用として栽培されている。



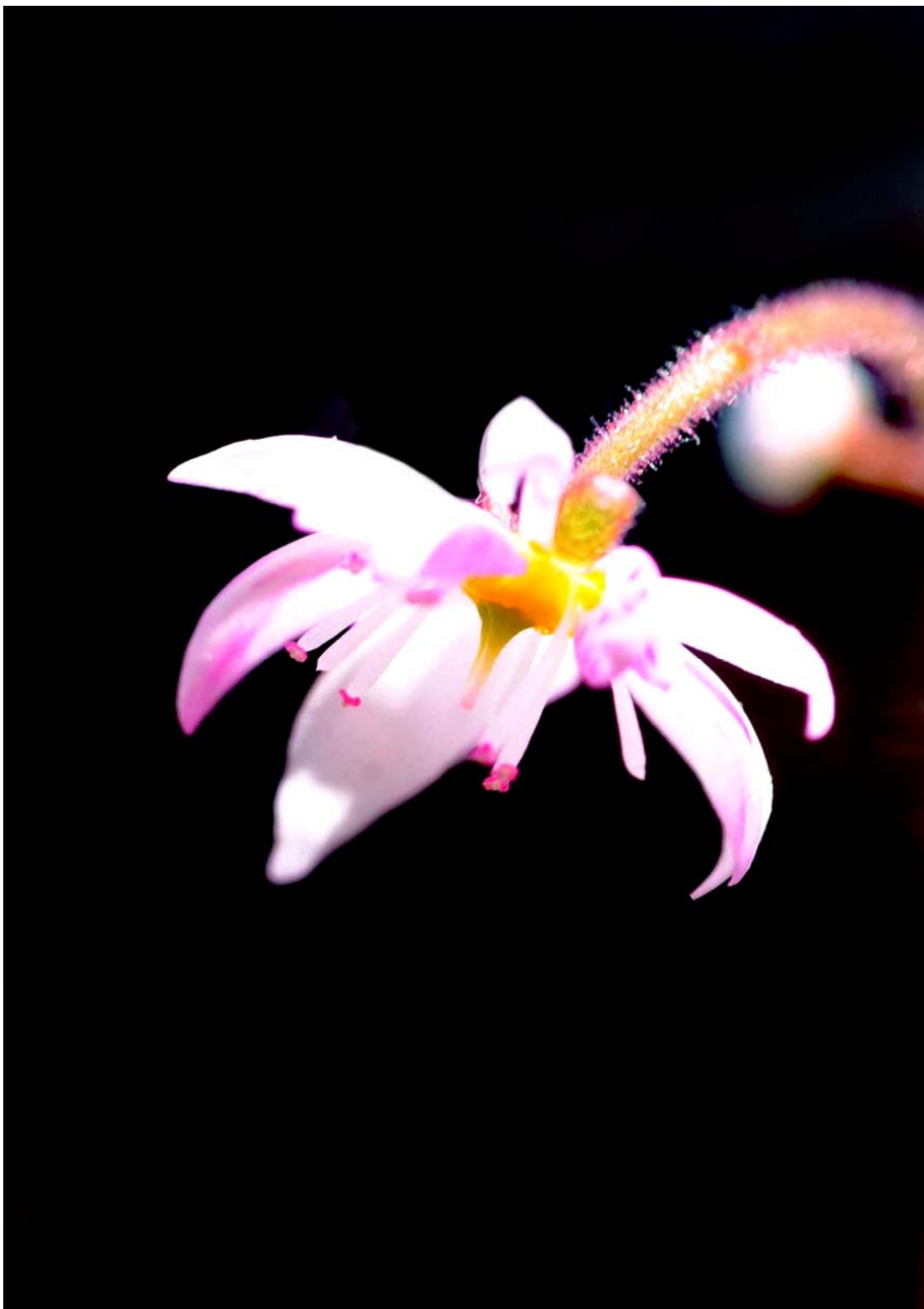
ユキノシタはやや湿り気の多い半日陰程度の場所を好む。通常はすべての花弁は白であるが、いくつかの変種も知られている(栃木県太平山)。



3枚の小花弁だけが紅色のユキノシタ。このタイプは時々見かけることがある。(埼玉県本庄市)。



これも紅花のユキノシタで、小花弁3枚の他、大花弁2枚にも赤い斑点と淡い紅色が差した赤みがあって美しい。通常ユキノシタは大花弁2枚は下側に、小花弁3枚は上側に着くが、このユキノシタはしばしば逆転し、しかも普通のユキノシタより背丈が高くなることも多い。



この紅花ユキノシタは、大小の花弁の大きさに大差はないが、花全体は比較的小ぶりで、茎のあちこちから分枝して、数段の高さになって多くの花をつける。またランナーもよく出して周辺へと繁殖してゆく(前ページと同種)。



珍しい紅花ユキノシタ、このときに一度見てから数年経つが、以来まだ見ていない。どこかでダイモジソウの遺伝子を取り込んだものなのかもしれない(園芸種)。



ダイモジソウは秋の花で、9月～11月頃、可憐な花を咲かせる(埼玉県深谷市：栽培品)



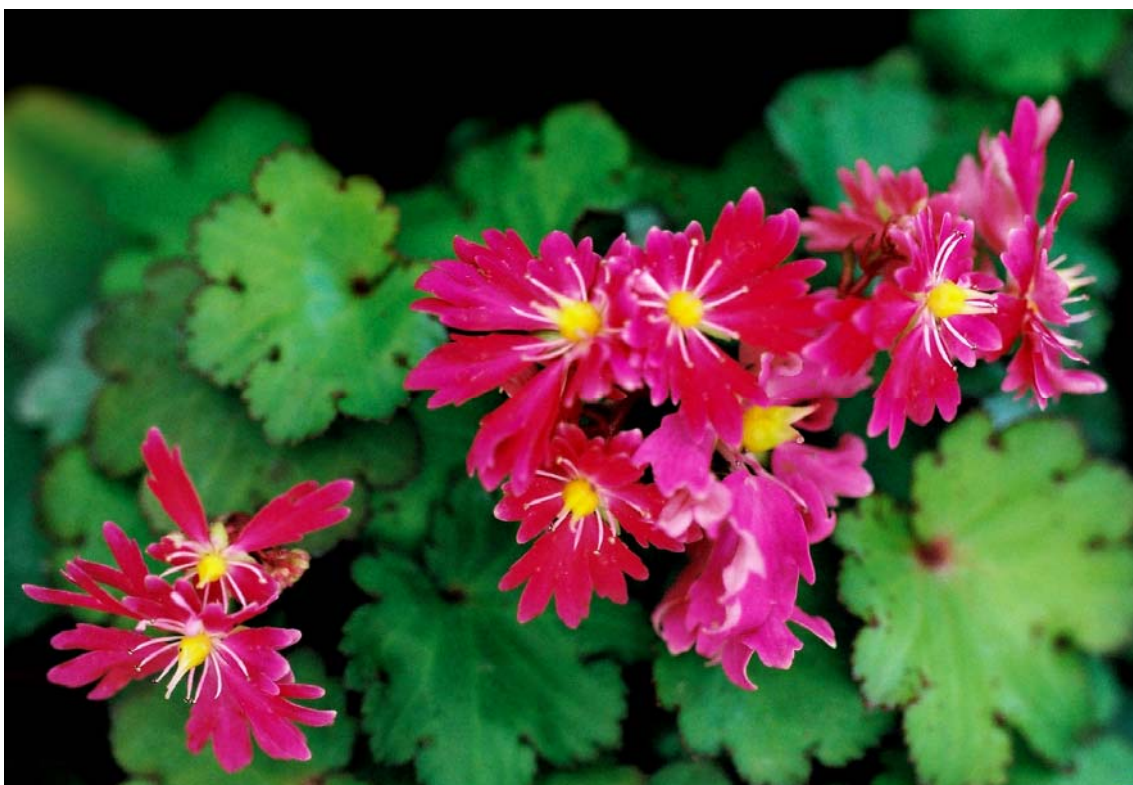
ダイモジソウの色彩は豊富で、白や赤を初めピンクの濃淡から黒赤までいろいろである。



ダイモジソウの花弁は通常は5枚で、下の2弁が大きく上の3弁が小さくて、大文字に見えるが、上下が逆転したものや、6弁の花もしばしば見られる(埼玉県深谷市)。



ダイモジソウの花期は長く約1ヶ月に及ぶ。



ダイモジソウの花弁は『大』の文字に極めて近いものから、はっきりしないものまで、これも色々で、上記写真のように花弁に切れ込みのあるものや八重咲き種も多い(埼玉県深谷市)。



淡いピンクのダイモジソウ、これは花弁に切れ込みが多い種である(埼玉県深谷市)。



天地が逆の大文字になっている。しかも花卉の総数が普通は5枚だが6枚あるようだ。

[目次に戻る](#)